

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	大病院の職員に在宅医療についての意識を高めたアプローチ
演者名	胡曉華 ¹⁾ 、山中ゆかり ¹⁾ 、安藤 真弓 ¹⁾ 、大石 奈央 ¹⁾ 、大杉泰弘 ¹⁾
所属	潁田病院 家庭医療センター 1)

目的

在宅医療の推進に診療報酬・制度の改定など様々な取り組みがなされている。しかし、医療の現場ではすべての医療従事者が在宅医療について十分理解し、行動できるとは言いがたい。特に、担癌患者をはじめとした在宅医療の適応となる患者を直接かつ多数診療している大病院において、在宅医療に関する意識付けや理解度を深めることが今後在宅医療推進に不可欠と考える。しかし、大病院で退院調整に直接関わる医師やソーシャルワーカーに、在宅医療について説明し、理解を深めてもらう機会は非常に少ない。私達は下記のように在宅医療の推進について実践した結果、医師やソーシャルワーカーが参加しているカンファレンスや会議に直接出向いて、在宅医療について説明する手法が有効であることがわかったため、昨年に引き続き報告する。

実践内容

私達は所属する地域の大病院の医師やソーシャルワーカー全員が参加する各科のカンファレンスや会議に直接出向いて、在宅医療について説明会を 2013 年 6 月より、総合診療科、婦人科、肝臓内科、循環器内科の 4 診療科およびソーシャルワーカーを含め、計 5 回開いた。各診療科で在宅医療に関する事前及び事後の意識調査を行い、説明会前後の在宅紹介患者数の推移を比較した。

実践効果

各科医師の説明会後の意識調査では在宅医療について理解が深まった、在宅医療について紹介する意識が向上したという結果であった。説明会後に短期間(直後からの 3 ヶ月)ではあるが、2 つ診療科及びソーシャルワーカー経由の紹介患者は説明会前(直前までの 3 ヶ月)に比べ、明らかに増加した(総合診療科 0 人→5 人、肝臓内科 0 人→6 人、病院全体 14 人→25 人)。

考察

大病院の医師やソーシャルワーカーが参加するカンファレンスや会議に出向いて、在宅医療について説明するアプローチは医療関係者に直接介入でき、短期的に在宅患者を増やす有効な手段と考えている。